唐の元康について

伊藤隆寿

一　肇論及び肇論の注釈書についての研究は、多くの問題と課題があるが、特に、現存の注釈書の比較研究は必須の事柄であろう。中でも、元康の肇論疏は、時代的にも、内容的にも最も整った勝れた書と評価されており、その研究は、肇論そのものの解読を行う上からも欠かすことは出来ない。そして、慧達撰と伝えられる注釈書との比較研究は、当面の課題である。そこで、元康について、彼の仏教史上における位置を明らかにしたいと考えているのであるが、今回は、我国における元康についての伝承を吟味して、その端緒にしたいと思う。

二　現存の肇論注釈書は、元康の書を含めて九部あるが、[1] その中で、最も古いもの、とされているのが、慧達の疏三巻である。この作者については異説があり、問題の書であるが、内容的に現存最古のものとされていること周知のごとくである。元康の疏は、この書に次ぐことになる。他は、元康以後、しかも宋・元・明代の書であり、宋遵式（九六四―一〇三二）までかなり開きがある。ただ、我国の円仁の承和五年（八三八）の入唐求法目録等には、唐代の注釈書が四部程記されており、義天録にも二部録されているから、宋遵式までの間に多くの肇論研究書が存在し、従つて肇論の研究が盛んに行なわれたことが知られる。しかし、唐代のそれらの書は、元康以降の成立であること間違いないであろう。その点、元康の疏の果した役割、影響ということを考察しなければならないが、先の遵式も、元康から影響を受けているとの先人の指摘があり、また宋暁月の夾科肇論序及び科文も、元康に従つたものである。我国にも割合早く伝えられ（七四〇年書写の記録）ており、広く流布し用いられたと考えられる。

三　次に、元康の師承・学系についての我国における伝承に言及すると、我国では、吉蔵―碩（ジャク）法師―元康という学系を伝える。[2] これは、恐らく安澄の中論疏記で引用する「述義」の文に依るものと思われる。巻一本に

述義云、高麗国遼東城大朗法師、遠去燉煌郡曇慶師所（中略）法

朗師得業弟子延興寺吉蔵師、吉蔵師得業弟子、碩旻邃等（大正六五、二二上）

とあり、右の述義は、安澄が頻繁に引用する元興寺智光の中論疏述義である。[3] つまり、智光は、吉蔵の門下として、第一に碩法師を挙げたのである。次に鎌倉時代の東大寺具書には道慈律師に言及して「大宝元年入唐謁嘉祥孫弟元康法師精三論」（続群書類従第二十七輯下、八三頁）とあり、奈良から平安時代において、碩法師及び元康の著書を参照しつつ、先の学系説が南都に行なわれるに至ったと考えられる。ここで問題となるのは、碩法師である。安遠の三論宗章疏や東域伝燈目録では、彼に中論疏十二巻、三論遊意一巻があったことを伝え、我国に将来されていた。前者は、安澄が、先の述義に次いで多く引用している。また三論遊意は、大正蔵四五巻所収の三論遊意義であろう。今、比較対照は省略するが、本書と吉蔵の三論玄義、特に後半の別釈衆品（次別明造論縁起以下）とは、内容上よく一致することが知られ、南都において、碩法師を吉蔵の弟子とすることは首肯出来る。少なくとも、用語等から見て、吉蔵が大成したとされる摂山の三論学を継承する人であることは間違いないと思われる。ところが、碩という字が名前につく人物は、中国の僧伝には見当らないのである。しかし、智光等が吉蔵門下として第一に数え、著書も伝えられているのに、何ら言及されないというのは不思議である。そこで、続高僧伝の中で、吉蔵の門下と考えることも可能な人を検討したところ、巻三に立伝される唐京師清禅寺沙門釈慧賾（五八〇―六三六）が注目される。

彼は、湖北省江陵の出身で、九才で隠法師について出家し涅槃法華を聴き、のち別に三論を聴いた。十二才（開皇十一年、五九一）で江陵寺で法席を興し道俗の認めるところとなる。荊州（湖北省）の刺史宣竜公元寿がその名声を聞いて奏上し、ついに詔により京に入り清禅寺に住し講説した。武徳の初め、延興寺において仁王経の講座が設けられた際、吉蔵が大いに三論の宗旨を宣揚した。その時、慧賾も聴講し、するどい質問をしたが、吉蔵は彼の弁舌とその主張を絶讃したという。また貞観三年（六二九）からの波羅頗迦羅蜜多羅の訳場に参じ、特に清弁の般若燈論の訳出に従事し、その序文を製し、貞観十年（六三六）五十七才で寂している。以上が、慧賾伝の大略であるが、明らかに、長安における、吉蔵との関係を述べている。ところで、慧賾は、続高僧伝巻十一の隋西京日厳道場釈智矩伝の最後に、門人慧賾として名が出ており、一般には智矩の門下とされる。智矩（五三五―六〇六）は建康において、興皇寺法朗について三論を学んだ人で、吉蔵と同門の先輩である。しかも、揚州慧日道場から長安日厳寺と、吉蔵と行動を共にしており、吉蔵に先立つこと十七年、大業二年（六〇六）に七十二才で寂した。僧伝では、吉蔵に優ると

まで評価され、中論疏を著したという。そうすると、慧賾と智矩との出会いが何時であつたか不明であるが、長安において会したことは相違ないであろうから、智矩が日厳寺に入つた頃とすれば、開皇十九年（五九九）となり、それから大業二年までの七年間、つまり二十才より二十七才まで受学出来たということになろう。またその時期は、吉蔵も日厳寺に住していたと考えられるから、当然、吉蔵のことも熟知していたと見られる。しかも、吉蔵から受学可能な期間は智矩よりも長く、武徳六年（六二三）に吉蔵が寂すまで二十四年間あつた。智矩の寂後十七年間である。もつとも、慧賾は十二才で涅槃経を講ずる程の天才的な人物であり、長安に入つても、すでに多くの道俗の帰依を受け、時には応禅師に心学を禀けたり、大業の末には終南山に入るなど、巾広い学習をしている。従つて、智矩の寂後、さらに吉蔵について専ら三論学を研究したか否かは分らない。しかし、吉蔵から学ぶところも大いにあつた、という可能性は充分認められるように思う。

翻つて、智光の浄名玄論略述巻一本に、吉蔵のことを述べて次のように記す。

於是大師興隆大法、仍製浄名玄等、禀法之徒百千万衆、而善知法唯慧賾法師及一音慧蔵等焉（日本大蔵経第十四巻、二二〇頁）

右の慧賾法師に注意したい。智光には、十数部の著書があつたとされるが、現存するのは、今の浄名玄論略述と般若心経述義の二部のみで、他は後の人の引用により断片的に知られるに過ぎない。[5] 従つて、今確認のすべはないが、右の賾は賾の誤写ではなかろうか。草書体において、その可能性が認められる。また南都において、しばしば見られる文字の通用ということも無視出来ない。今、三論宗関係に限るが、我国へ三論宗を最初に伝えたとされる慧灌は慧観とも書かれ、慧師＝慧資・慧至、慧輪＝慧憐等とされ、棲霞寺の棲を栖・西と簡略化することもなされている。これらは、筆写の際に行なわれたもので、いわゆる音通である。そして、先程来の碩と賾は、共に呉音ジャクである。とすると、智光が、中論疏述義において、吉蔵門下の第一に数える碩法師と、浄名玄論略述で評価している慧賾とは同一人のことではないか、と推察されて来る。人物の評価は、その人の内において大体は定まれるものと考えられ、智光が自己の書の彼此において吉蔵の門下について全く異なる評価をするであろうか。我国における三論宗学系史に関する智光の伝述の影響は顕著であり、凝然等の述べる伝統説は、智光に淵源すると言つても良い。[6]

以上、総合して推察すると、碩と賾は音通として通用されたのではないか、ということと、賾は賾の写誤あるいは誤読ではないかということである。つまり我国の伝承にいう碩法師は、慧賾のことではないか、ということ、その際、吉蔵の門下という位置づけは充分可能であるということになろう。

四　他方、元康の伝を宋高僧伝巻四に見ると、ほとんど不詳と言つてよいであろう。姓、出身、生没年共に不明で、年代の表記は、唐の貞観中（六二七―六四九）に長安に遊学す、ということのみである。この貞観中という点が、碩法師つまり慧賾からの受学の可能性が出てくる。

彼は、姿形はふしくれていて醜く、背も低かつたが、性情は勇ましく、少聞多解、人々の認めるところであつた。山野に居し、常に観音を持誦し慧解を加えられんことを求めたという。また角が八支に分れた珍らしい鹿を飼育し、手なずけて、それに乗つて遠方に出掛けたりしていた。そして、この鹿の背に三論の書物を荷い、尻尾に小軸をつないで長安に入つたとされる。さらに都では、大布をまとい、防寒に使用する裏腹衣を着け、広さ一丈二尺もある笠をかぶり、都の人々は、皆覗き込んだという。異色の人物であつたことが知られよう。しかも、講座に列しては、その質疑応答において人々を圧倒し、ついに詔されて安国寺に入り、三論を講じ、疏及び玄枢を撰述したとされる。

元康の行実は以上のようであるが、注意されるのは、長安に入る以前に、三論を学んでいたということであろう。小軸を彼の著とすれば、すでに何らかの小篇もあつたことになる。従つて、僧伝に依り、慧賾との師弟関係を証する事柄は見当らないとすれば、我国における伝承は、他の理由、根拠によつて成立したものと言うべきであろう。しかし、彼の著書も、肇論疏が現存するのみであり、それには、自己の学系に関わる記述は見られず、外の中論疏等の注釈書に言及していたかどうかも分らない。この点は、吉蔵と慧賾との関係とは異なり、やや時代が下つてからの主張との印象もあり、我国三論宗における問題を含んでいるかも知れない。あるいは、元康の肇論疏の伝来に関する記述や道慈入唐の際の師は誰かの問題等と絡んで、先の伝承が成立したとも考えられる。道慈と元康との関係は、年代的に認めがたいとするのが一般であろう。

五　元康については、以上のごとく、その行実については詳細不明である。しかし、長安の安国寺に住して、三論の学僧として活躍し、多くの著書を残したことが知られ、隋唐初において、当時注釈書はほとんど著わされていなかつた肇論に注目して、後世に範たる注釈を加えたことは間違いない。少なくとも、現行の形の肇論に対する解釈の書は、彼が最初である。僧伝では、三論の疏と玄枢二巻を伝えるが、我国の目録では、次の九部を記録する。すなわち、

肇論夾科	一巻	中論疏	六巻
中論三十六門勢	一巻	十二門論疏	二巻
百論疏	三巻	三論玄枢	二巻
三論玄意	一巻	三論玄記	一巻

三論疏　三巻

である。吉蔵の後の三論学者としては随一であり、三論学衰退の時期にあつて、如何に気を吐いたかが知られよう。しかし、僧伝において師承が不明であるごとく、現存の肇論疏からは、吉蔵の学系に連なると思われる学風は感じられない。僧伝に現われた飄々とした姿が、真実を語つていると思われる。ただ、断片的ながら、安澄は、多くの場合、碩法師の中論疏と元康のそれとを並列させて引用しており、その対比により、両者の異同を、ある程度推察することは可能であろう。現存の文献に依る限り、元康と慧賾との師弟の関係を認め得る積極的根拠は見出し難いが、南都の伝承を一概に否定し去ることも出来ぬように思われる。これらの点も、肇論疏の解読という作業を通して、妥当な結論を導き出すことが要求されよう。

1　詳しくは牧田諦亮「肇論の流伝について」（肇論研究、二七二頁以下）参照。

2　境野黄洋『日本仏教史講話』第一巻、三六二頁。島地大等『日本仏教教学史』九〇頁参照。さらに古く江戸時代の三論系譜においても明示している。東大寺蔵『大乗三論宗嗣資記』参照。

3　安澄は、『中論疏記』の中で、三種の述義を引用する。いずれも元興寺智光の書と考えられ注意を要する。他の二つは『肇論述義』と『浄名玄論述義』である。また略述とも称され、最後の書は『浄名玄論略述』として現存する。

4　僧伝中にも収録されるが、大正蔵所収の『般若燈論釈』にも附さる。多少字句の出入が見られる。

5　智光の著書については、拙稿「智光の撰述書について」（駒沢大学仏教学部論集第七号、昭和五十一年十月）参照。

6　拙稿「三論宗学系史に関する伝統説の成立」（駒沢大学仏教学部研究紀要第三十六号、昭和五十三年三月）参照。

7　元康『肇論疏』巻上の奥に「大唐開元二十三年、歳在乙亥、閏十一月三十日、楊州大都督府江都県白塔寺僧玄湜、勘校流伝日本国大乗大徳法師」（大正四五、一七四中）等とあり、さらに「就中日本国大乗大徳法師者、指道慈律師耳　三論円宗沙門聖然」（同一七四下）とある。この聖然（一二四九―一三一二）の説は、先の『東大寺具書』と時期及び軌を同じくするものである。

（駒沢大学助教授）